

宮城県大川小学校被災児童鎮魂塔



亡くなられた学童・教職員・地区の方々の追悼供養をつとめる三十三年安居会（6月3日）



梅花流全国大会で厳修された震災物故者三回忌法要の導師をつとめる不老閣猥下（5月29日 宮城県利府町）



梅花流大会の会場の様子（5月29日）



復興支援室分室開所式
坂野総務部長（左）と久間室長（右）
（5月30日）

「高度成長の忘れもの」

ハッ場ダムは引き返せないのか

森 まゆみ

群馬県長野原町に計画されているハッ場ダムのことを知ったのは一九八五年ころ、それは私が地域雑誌「谷中・根津・千駄木」を始めて間もないころでした。三遊亭円朝の調査で上州を旅した時に、草津からハッ場にいたる細い道を通りました。そのころまだハッ場ではダムの反対運動が強く、道の両側には反対の幟がずらりとたっていました。

文化財が傷つけられる

それから二十年、ちっともダムはできませんでした。私は文化庁の会議で、いよいよハッ場のダム本体工事がはじまるので、名勝吾妻溪谷の一部をダム

が埋めてしまいがこれでもいいのか、という案件を審議しました。委員たちは「うーん」と口をつぐみ、「これで本当にいいのでしょうか」「時のアセスメントというものがありませんから。本当に必要なダムなのでしょうか」と意見をいいましたが、文化庁によれば一九七〇年、これでも名勝の景観保全のために六〇〇メートル上流へダムサイトを移すよう、努力した経緯がある



ハッ場ダム 本体関連工事現場

というのです。

しかもそこには国の天然記念物の川原湯岩脈があつて、これもダムへの沈むというのです。会議でろくに反論もできなかつた私は忸怩たる思いで、二〇〇八年夏、ふたたび、先述の地域雑誌の



ダム計画の看板

編集室「谷根千工房」の仲間たちとハツ場ダムの現地を訪れました。それは息をのむ経験でした。群馬県は富岡製糸場を世界遺産にする活動もしていて、私はハツ場のある長野原町の隣りの六合（くに）村を訪れた帰りだったので。六合村は国の重要伝統的建造物群保存地区になった直後で、美しい村で養蚕を復活することに村民は燃えていました。ところがハツ場に入ると打って変わって山肌は削られ、物すごい工事音が響き、お社やお墓も高台に移され、驚くべき自然の改変でした。

り上がり式」の現地生活再建案を飲みました。ふるさととはダムの底に沈んでも、ダムの畔で、温泉も引き直して、ふるさとの近くで生活できるという夢を抱いて。

ちよどバブルのころ、国や県は住民の意を迎えるために、一〇〇〇人収容の観光会館だのクアハウスだの、夢のような館をぶら下げたのです。これらは今も全くできていません。二〇〇七年にも「ダイエツトバレー構想」などというものがありません。都会の三十代以降の肥った女性をターゲットにエステサロンやサイクルセンターを整備し、ハツ場で長逗留、エクササイズをさせるという荒唐無稽なプランでした。

いっぽう九〇年代からは漏水防止、節水、工場の移転で首都圏は水あまりが続く「利水」の名目はなくなりましした。「治水」についても上流の森林が育ち、カスリーン台風のときのような被害は起こらないと、国土交通省の出す試算データを疑う専門家が多数です。

長い闘争の歴史

二〇〇八年夏、民宿「雷五郎」に泊まって、女主人の豊田政子さんからお話を聞きました。それによると一九五二年にこのダム計画は浮上したというのです。私の生まれる二年前。一九四七年のカスリーン台風は関東平野で一〇〇〇人以上の死者を出しました。それで利根川下流の治水と首都圏の用水（利水）のためにダムが計画されました。やんば館というPR施設にいくと、革新美濃部都知事までが、録音で東京都民のために上流の山村が犠牲になっていただき申し訳ない、と謝辞を述べています。

もちろん、地元では猛烈な反対運動が起きました。しかし群馬は福田、中曾根、小淵という三人の保守政治家を出した土地です。三全総以来の国土開発計画のなかでハツ場ダムも位置づけられました。

しかし吾妻川は強酸性なので飲用には不適とされ、ダムはいったん頓挫。品木ダムができて中和が可能になったため、一九六五年に計画は再浮上、八六年に閣議決定、ついに住民は県の提示した「ず

民宿「雷五郎」の先代豊田香さんは反対運動の先頭に立って病に倒れました。娘さんからそのころのお父さんの苦しみを聞くことができました。叔父の嘉雄さんの作ったうたです。

ダム阻止の使命担いて町議席

得たるも病に倒れ慚愧す

昔話も聞きました。川原湯温泉は打ち身やねん挫に良いというので、明治のころ講道館を開いた柔道の嘉納治五郎が別荘を持つていたこと。あるいは酸性のつよい草津に滞在したあとの「仕上げの湯」としてみな歩いてきた

こと。第二次大戦中に草津近郊で鉱山が発見されたのをきっかけに国鉄吾妻線（現JR）が引かれ一九四五年開通、それから川原湯は栄えました。



溪谷にかかる吾妻線 しかし、向こうにはつけかえ国道の建設が進む

ダムを受入れてからの交渉も大変でした。全水没は川原湯と川原畑地区、一部水没が横壁、林と長野原の三地区。しかし補償交渉は難航し、補償基準の調印にこぎつけたのは実に二〇〇一年、代替地分譲基準の調印は二〇〇五年。というのは代替地の地価は最低でも一〇万、川原湯の越す打越地区では坪一七万と周辺価格に比べびっくりするような高さで、これでは前橋市内の住宅地が買えてしまいまず。それで住民たちもダムに沈むふるさつに見切りを付け、前橋や渋川市内へ転出してしまいました。(地震で崖の崩落した福岡県玄海島の代替造成地は坪九〇〇〇円)。

しかも造成は遅れ、生活の見込みはたちません。一九七九年に川原湯に二〇一戸あった世帯は二〇〇七年には六三戸と三分の一以下になり、しかも代替地への転出を希望する家は三六戸にすぎないということでした。

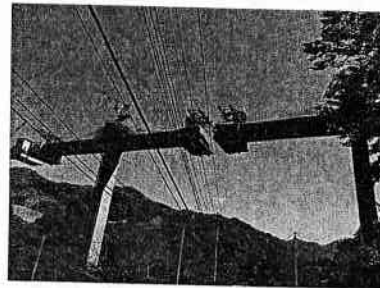
な。湯もよし、料理もよし、夜には星が出て、吾妻線の最終列車が山の向こうに上っていくのが見えました。地元では「銀河鉄道」というそうです。静かになつたら今度はムササビが窓から見えました。こうしたたずまいは何百年もかかって醸し出されたものです。木もない平らなニュータウンのような代替地に移って果たして客は来るのだろうか、と心配になりました。

土地には「もうできると決まったものを、今更東京からのこのこ来て反対なんてさわがないでくれ」という人もいます。かと思つくと「反対した世代はほとんど死んだ。出て行つても心労やうつ病でなくなるひともいる」「ダムのことは考えないようにしている。早く代替地に移つて安らかな生活がしたい」「近所がいなくなつてひとりぼっち。一軒だけ残つたら移らざるを得ない」という人もいます。お話を聞いてあらためてなんと過酷な計画かと思ひました。ダム計画のおそろしさは自然の破壊とともに、こうした心の破壊です。

八ッ場への無関心

二〇〇八年秋、私は再び、上野駅から朝十時の特急『草津』号に乗り、川原湯温泉で下りました。なんだか去年より急ピッチで工事は進んでいるように感じた。山の中の三ッ堂がずっと高いところに白木で新築されています。いかにも野仏といういい感じに自然石の中に並んでいた仏像は模造石のなかに整列させられていました。文化も歴史もあつたものではありません。吾妻渓谷だけはそのままでした。これも国土交通省はダムができれば川の水の量が増え、景観が改善される、と

いつています。枯れた滝に水道水を流して悦ぶような話ではないですか。



八ッ場ダム湖面一号橋

今度は山木館に泊まりました。ひなびた宿です。木枯らし紋次郎かなんか出てきそう

いっぽう、計画がもち上がつてすぐ河川敷を買い占めて小屋を建て、高く売つてもうけた人もいるらしいし、中止の場合の未来を考えて土地を売らない人もいます。また代替地が高すぎて買えないと言つて借地や借家の住民もいます。

もうひとつの問題はこのダムをつくるのに、東京、千葉、埼玉、茨城、栃木、群馬などの一都五県は税金を支出しています。ダムの目的が下流の利水と治水なので当然の話です。こんな話を東京ですら「八ッ場、それどこ？」というくらい関心がありません。自分たちの税金が毎年何百億と使われ、一人一万円くらいはかかっているのに。東大の都市工学の先生にも話したのですが「あれはもう無理でしょ。着工しちゃったから」というので、おどろきました。

「コンクリートから人」の挫折

二〇〇九年、一躍、八ッ場にスポットライトが当たる日が来ました。そう、政権交代です。「コンクリー

トから人へ」をマニフェストにした民主党は政権の座につくと「八ッ場ダム」中止を目玉として前原国交相が宣言しました。それからマスコミがどっと押し掛け、八ッ場ってどんなところだろうと見学者も増えました。なかには付け替え国道の湖面二号橋の橋脚を八ッ場ダム本体だと思つてそれをバックにっこり、なんてアホらしい話も多かったのですが。

「八ッ場止まってよかったですね」という私に、「NGO八ッ場あしたの会」の渡辺さん、嶋津さんは「もう一転二転するでしょう」と妙に冷静でした。自民党政治の長年のツケを民主党が払わなければなりません。たまたま会った前町長が「東京のためには犠牲になるんだ。ダムができてよくなったところなんか一つもない」と言っていたのも心に残りました。これからダム観光というのを目指すわけですが、誰が人造湖を見て感動するのでしょうか？

そして二年後、やっぱりと思うようなことが起こりました。二〇一一年一二月、前田国土交通大臣が

は縄文各時代の遺跡も見つかっています。「ダム検証のあり方を問う科学者の会」の方たちはダムを中止して遺跡を保存フィールドミュージアムを作つてほしいという要請を出しましたが、国土交通省や文化庁はなんの反応もしませんでした。

二〇一三年五月

新緑の吾妻溪谷を見たのは初めてです。あらためてこんな美しい溪谷と樹々を水に沈めようなんて、信じられない思いでした。だいたい国道と鉄道のあるところにダムをつ

くろうなんて誰が考えたんでしょう。そんな計画は全国どこにもありません。その付け替え鉄道と付け替え国道をつくるのにも、ものすごいお金と時間がかかっているのです。



美しい溪谷と人工物
でもまだダム本体はできていない

八ッ場再開を言明したのです。これはいったん決めた国の計画はどうしても遂行するという官僚の面子をかけた巻き返し、そして長い間翻弄された地元自治体と賛成派住民が「中止の中止」を訴えたからです。

3・11東日本大震災後、人びとの目は被災地と原発事故へと向い、また八ッ場は忘れられてしまいました。

私は知り合いの地質研究者たちと雪の八ッ場を巡検したこともあります。地質学者はこれは新しい地層だな、というのが二万年前だったりします。それによると二万四〇〇〇年前の浅間噴火による大桑泥流というのが、いまの八ッ場の地層を形成しています。そこを吾妻川が削つて四つの平坦地を形成しました。ダムの湛水によってこの大桑層が地滑りを起こすのではないかと懸念する研究者もいます。

そして今度は遺跡です。天明三年八月の浅間山の噴火で流れ出した泥流は八ッ場の村を一瞬にして埋めました。その証人が東宮遺跡（ひがみや）です。さらにここに

二一〇〇億ではじまった計画はメンテナンスも入れれば一兆を越えるだろうと言われています。

恐るべき自然の改変 私たちは自然への恐れを失つたのでしょうか？

福島でも大雨でダムが決壊し、死者が出ました。盛り土と切り土で作られる代替地の地盤も心配です。作つてからも浚渫などメンテナンスにお金がかかります。廃ダムにもお金がかかる、ダムは時代遅れの産物として各地で見直され、県知事は中止の意向、国はあきらめていないといわれています。

いくつもの橋がかかり、道の駅ができ、ダム完成の既成事実が造られはじめています。すてきな共同湯『笹湯』につづき、聖天様の露天風呂も六月いっぱいまで閉めるそうです。でも、まだ本体はできていません。私は負け犬の遠吠えでも、『ダムはいらないし、危険』と言いつづけたと思います。山の神さまに申し訳ないような気がするからです。

(つづく)

(作家・編集者)